HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アトラ・ハシース叙事詩(Atra-hasis)(2)
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，44：29-56
発行日	2009-11-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

アトラ・ハシース叙事詩（Atra-hasīs）(2)

桑　原　俊　一

キーワード：古代メソポタミアの神話，アトラ・ハシース叙事詩，人間の創造神話，洪水神話

本稿はアトラ・ハシース叙事詩の翻訳と脚注を施こした続稿である。承前において使用した主たるテキスト記号やその他の記号はそれを踏襲する。各行の通し番号は前稿を引き継ぐことにするが，それに続く本稿の始めの部分はテキストの重複と断片的にすぎることもあり，訳出を控えた。

イギギたちは過重な労働に耐え難くなったため，エンリルに反旗を翻す。エンリルは彼らの謀反に対し，知恵の神エンリルが登場し，その解決策が図られる。本稿ではこの部分のテキストから始める。解決策として人間が創造されることになる。神々の世界に人間が関与することになった。それはひとえにイギギの苦役や労苦を人間に肩代わりさせることに他ならなかったのである。メソポタミアの文学には関連するモチーフがしばしば登場する。必ずしも苦役や過重な労働ばかりでなく，冥界に下ったイナンナ／イシュタルが冥界から解放されるときにはそれに代わる代理者を留め置かなければならなかったし，帝国の危機に際し，一時的に代理の王を玉座につけることもあった。したがってこの書板に出てくる人間創造の代理者性はメソポタミア文学や文化にしばしば登場するモチーフと脈絡を一にするといえよう。なお，テキストについてはE MB92608 と Aiv–Aviii を本稿文末に添付した。

Eiii　1　188［　　］xx

2　189　wašbat ^{d}Bēlet-ilī šassūru[1]

ベーレット・イリー[2]，誕生の女神は坐している。

3　190　šassūru lididia[3] libnima

誕生の女神を降し，造りださせよう。

4　191　šupšik DINGIR[4] awīlum lišši

そして人間に神々の苦役を負わせよう。

5　192　iltam issû išālū

彼らは女神を呼び寄せて，訊ねた。

6　193　tabsūt ilī erštam ^{d}Mami

神々の産婆，聡明なマミに。

7　194　attima šassūru

「あなたは誕生女神，

8　　baniāt awīlūti

人間の創造女神（だ)。

9　195　banima lulla libil abšānam

原初の人間を創造して下さい。彼は軛を負うことだろう。

10　196　abšanam libil šipir ^{d}Enlil

彼に軛を負わせよう。エンリルの働きを。

1　シュメール語 ŠA・TÙR からの借用語。

2　基本的には豊饒女神である。母なる女神の一つの神であり，ベーレット・イリーは「神々の婦人」を意味する。歴史時代以降になると母なる女神や誕生の女神が神々とのペア―との関係にあることから推測できるように明確な名称を伴って登場する。メソポタミアには，マミ（Mami, Mamma, Mama）「母」，ディンギルマハ（Dingirmah）「高貴な（女）神」，ニンマハ（Ninmah）「高貴な婦人」，ニントゥ（Nintu）「誕生の婦人」といった女神たちが登場する。アトラー・ハシースにも人間の創造に関与する女神として出てくる。

3　Lambert/Millard は li-gim?-ma? と取る。意味は「子孫」。

4　ilī と読む。

11　197　šipšik ilūm awīlum lišši
　　人間に神々の重労働を負わせよう。」
12　198　^{d}Nintu piaša tēpšamma
　　ニントゥは口を開いて，
13　199　izzakar ana DINGIR・MEŠ rabûti
　　言った。偉大なる神々に。
14　200　ittijame la naṭû ana epēši
　　「わたしが造るには相応しくございません。
15　201　itti ^{d}Enkima ibašši šipru
　　その働きはただエンキのものです。
16　202　šūma ullad kalama
　　彼は全てのものを浄くいたします。
17　203　ṭiddam liddinama anaku lupuš
　　彼がわたしに粘土をお渡し下さったら，わたしは（それ）
　　を造りましょう。」
18　204　^{d}Enki piašu īpušamma
　　エンキは口を開いて
19　205　izzakar ana DINGIR・MEŠ rabûti
　　言った。偉大なる神々に。
20　206　ina arhi sebuti u šapatti
　　「月の第 1 と第 7 そして第 15 の日に，
21　207　tēliltam lušašikin rimka
　　わたしは浄め，つまり沐浴の儀式を執り行ないましょう。
22　208　DINGIR išten liṭbūhuma
　　一柱の神を屠らせましょう。
23　209　litellilū DINGIR・MEŠ ina ṭībi[5]

5　この行からテキストは Aiv 40–50（Eiii 33 まで）と並行する。Lambert/Millard: itību は「浸すこと」と取る。Cf. マリにおける浸礼儀式を参照のこと。

(そうすれば)神々は浸礼によって浄められるでしょう。

24　210　ina širišu u damišu

彼（一柱の神）の肉と血で

25　211　^{d}Nintu libaliil ṭidda

ニントゥに粘土と混ぜ合わさせましょう。

26　212　DINNGIR-ma u awīlum

（こうして）神と人間は,

27　213　libtallu puhur ina ṭiddi

混ぜ合わされましょう。粘土と共に。

28　214　ahriatiš ūmi uppa i nišme

絶えることなくわれらは太鼓の音[6]を聞きましょうぞ。

29　215　ina šīr ili eṭemmu libiši

神の肉から死霊[7]を現れ出させよう。

30　216　balṭa ittašu lišēdišuma

それ（太鼓の音）は生きているしるしとして生き物に知らされよう。

31　217　aššu la mušši eṭemmu

決して忘れ去られることのないように死霊を現わしめよう。」

32　218　[ina puh[8]ri] īplū anna

6　シュメール語　ÙB　アッカド語　uppu ここでは「心臓の鼓動」を意味する。215-216 行を参照。

7　シュメール語　GIDIM, アッカド語　eṭemmu はメソポタミアに固有な概念である。死者の霊を意味するが, 形相をもつもので, 献水や供物を受ける。「家族の死霊」,「彷徨する死霊」,「(冥界から）死霊を甦らす」,「死霊による誓い」といった表現を取って出てくる。したがって所謂幽霊のような存在とは異なる。

8　úh

［集会で,］彼らは答えた。『その通りだ』と。

33 219 rabûtum ^{d}Anunna

偉大なアヌンアキ,

Aiv 51 220 pāqidû šīmāti

運命を割り当てし者。

52 221 ina arhi sebuti šapatti

月の第 1 と第 7 そして第 15 の日に,

53 222 teliltam ušaškin rimka

彼は浄めの沐浴を整えた。

54 223 Ilawela[9] ša īšû ṭēma

イラウェラ，知性に長ける者,

55 224 ina puhrišunu iṭṭabhū

彼らは彼らの集会で屠った。

56 225 ina širiū u damišu

彼らの肉と血に

57 226 ^{d}Nintu ubalil ṭiṭṭa

ニントゥは粘土を混ぜた。

58 227 ahria［tišu ūmi uppa išmû］

絶えることなく，彼らは［太鼓の音を聞いた。］

Av 1 228 ina šir ili eṭ［emmu ibši］

神々の肉から［死霊が現れた。］

2 229 talṭa ittašu ušē［dišuma］

それ(太鼓の音)は生きているしるしとして生き物に［知らされた。］

3 230 aššu la mušší eṭemmu［ibši］

決して忘れされることのないために死霊が［現れた。］

---

9 この文字の読みが確定する以前は ^{d}Gestu'e, ^{d}We-ila, ^{d}Ilu-awilu などと読まれていた。

4　231　ištuma iblula ṭiṭṭa šâti

彼女（ニントゥ）がその粘土を混ぜ合せた後で，

5　232　issi ^{d}Anunna ilī rabûti

彼女は招集した。アヌンナキ，偉大な神々を。

6　233　^{d}Igigi ilū rabûtim

イギギ，偉大なる神々は，

7　234　ru'ṭam iddû elu ṭiṭṭi

粘土に唾を吐きかけた。

8　235　^{d}Mami pīaša tēpušamma

マミは口を開いて，

9　236　izzakar ana ilī rabûti

言った。偉大なる神々に，

10　237　šipra taqbianimma

「あなた方はわたしに仕事をお命じになった。

11　238　ušakilil

わたしは（それ）を完成した。

12　239　ilam taṭbuh qadu ṭemišu

あなた方は一柱の神の理解力もろとも彼を屠った。

13　240　kabtam dullakunu ušassik

わたしはあなた方の苦役を取り除いた。

14　241　šupšikkakunu awīlam ēmid[10]

わたしはあなた方の重労働を人間に負わせた。

15　242　taštahada rigma ana awūlūti

あなた方は喧騒を人間に授けた。

16　243　apṭur ulla[11] andurara aškun

10　241 行から 260 行はテキスト P による復元が多い。

11　語彙集　Proto-Ea＝naqbu 634f. 参照。
UL＝ullu ša kalbi.

わたしは軛を弛め，自由を確立した。」

17 244 išûma anniam qabâša

彼らは彼女のことばを聞いた。

18 245 iddarrūma unaššiqu šēpiša

彼らは自由になり，彼女の足に接吻した。

19 246 panami ^{d}Mami nišassiki

「かつてわたしたちはあなたをマミと呼びました（が），

20 247 inanna bētet kalâ ilī

21 248 lū šumki

今や，あなたの名は（248）すべての神々の女王であられましょう（247）。」

22 249 itērbu ana bīt šīmuti

23 250 niššīku ^{d}Ea erištu ^{d}Mami

思慮深いエアと賢明なマミは（250）

運命の部屋に入った（249）。

Av 24 251 「ša［ ］

P 13 ［ša］ssūrātum puhhurāma

誕生の女神たちが集まった。

14 252 ṭiṭṭa ikabbasam mahariša

彼（エア）は彼女（マミ）の面前で粘土[12]を踏みつけた。

15 253 ši šipta ittanandi

彼女は呪文を唱え続けた。

16 254 ušamnaši ^{d}Ea ašib mahriša

エアは彼女を前にし彼女に（それ）を唱えさせた。

17 255 ištuma igmuru šipassa

---

12 煉瓦作りの経緯が叙述される。呪詛文書「When Anu created heaven」によれば，煉瓦神クッラ（Kulla）が目的のため粘土を千切るエンキにより創造された。Dally の脚注 14 を参照。

彼女は呪文を終えると，

18　256　kerṣi 14 uktarriṣ

彼女は（粘土から）14 個を千切り取った[13]。

19　257　7 kerṣi ana imitti

7 個を右に，

20　258　7 kerṣi ana šumeli iškun

7 個を左に置いた。

21　259　ina birišunu ittadi libbiti

それらの間に煉瓦[14] を据えた。

22　260　[　　] xx abunnati u[š] x (x)

13　粘土と人間創造を関係づける物語に「エンキとニンマハ」と名称されるシュメール語で書かれた創造神話がある。150 行ほどの比較的短い物語であり，アトラ・ハシース叙事詩の存在を前提にしていたと思われる（おそらく前 1500 年ごろの作品)。この神話については本稿と関連する部分に留める。母なる女神ナンムはアプスーに眠るエンキを起床させて人間を創造すべきことを告げる。任務はエンキによってナンムに委ねられる。エンキの指示は，エンキの住まいが置かれるアプスーの肥沃な粘土を取り，それを千切り，形を整え人間を創造すること，であった。人間創造の理由はほぼアトラハ・ハシスを上書きしたと思われる。つまり下級の神々の労役を彼らから解放するためである。神々の代理者として人間が造られる。この神話の詳細については拙論「創世神話の系譜 ── 古代メソポタミアの資料から ──」『北海学園大学人文論集』39 号，(2008 年）176-183 頁を参照。

14　泥煉瓦（煉瓦）は人間の創造能力の原型を象徴すると思われる。母なる女神ベーレット・イリーの別名の一つは「ラピス・ラズリ煉瓦」である。初期王朝時代に使用された丸パン形した ‘平凸’ 煉瓦は妊婦のお腹の膨らみ具合によく似ているし，実際適当な形でなくても建造物に広く使用された。Lambert/millard は出産時の椅子として使用された煉瓦構造を意図しているが，それを支持する証拠は何一つとしてない。Dally による脚注 15 は説得力がある。呪詛と儀礼が問題になるが，出産儀礼についての詳細については知られていない。注 23 を参照。

主要校訂本は大幅に欠損しているが，アッシリア校訂本によって補完することができる[15]。

7　彼女は葦を使って（それ）を開き臍の緒を切った。
8　賢明にして聡明な，
9　7と7[16]の誕生の女神たちが集合した。
　　7（女神）は男を産み，
10　［7］（女神）は女を産んだ。
11　誕生の女神たちにとっては運命創造者である。
12　彼は彼らを一対にして［　　］。
13　［　　］は彼らを彼女の前で一対にして［　　］，
14　マミは（これらの）きまりを人類のために考案したのだ[17]。
15　「「産褥にある誕生の婦人の部屋に，
　　煉瓦は7日間寝かせておかねばならない。
16　賢明なマミ，ベーレット・イリーは敬意を払われよう。
17　産婆は誕生の婦人の部屋で喜ぼう。
18　そして妊婦が赤子を産み落としたとき，
19　赤子の母親は自ら離れなければならない。
20　娘に対して男は［　　］。

Eiv　1　271［　　］

15　Lambert/Millard, K3399＋3934 (S), Obverse iii, 60.
　　ただし重複部分は省略した。

16　14柱の女神を意味する。

17　C. Wilcke, ‘Familiengründung im Alten Babylonien’ in *Geschilelchtsreife und Legitimation zur Zeugung*, (ed.) J. Mrtin und Th. Nipperdey, Historische Anthroplogie 3, *Kindheit, Jugend, Familie* 1 (Friburg/München, 1985) による復元に基づく。

2　272　[　　] irtiša
　　[　　] 彼女の乳房
3　273　[　　] ziqnu
　　[　　] パン
4　274　[　　] lēt eṭ[18]li
　　[　　] 若者の頬に
5　275　[ina nā]rāti šîulî
　　[　川] と通りで
6　276　[ih]îtirū aššatum u mussa
　　妻と夫は互いに求［愛する］。」
7　277　šassūrātum puhhurāma
　　誕生の女神たちが集められた。
8　278　wašbat [d]Nintu
　　ニントゥは座っていた。
9　279　immanu arhi
　　彼らは月々を数え，
10　280　[ina bīt] šimati issû ešra arha[19]
　　運命の［部屋で］10ヶ月目を呼び上げた。
11　281　[ešru] arhu illikamma[20]
　　10ヶ月がやってきた。
12　282　iqlup palê silitam ipte[21]

18　iṭ

19　以下Aが主要なテキストであるが 280 行から 300 行についてはEを基本にした。その理由はEテキストの保存状態がAより概ね良好であることによる。

20　Avi 1 eš-ru ITI il-li-[ka]-am-ma

21　Avi 2 [　　] up pa-le-e si-li-tam ip-tem
Lambert/Millard は前半部分を［ha］-lu-up pa-le-e「期間の経過」と読む。

彼女は枝[22]を切り取り，子宮を開いた。

13　283　namuruma hadû panuša

彼女の顔は輝き，喜びで満ちていた。

14　284　ī'pur kaqqassa

彼女は被り物で頭を覆った。

15　285　šabsūtam īpuš

彼女は産婆の術を施した。

16　286　qablīša itezeh

彼女は腰を締めて，

17　287　ikarrab

祝福した。

18　288　iṣir qēma[23] libitta iddi

彼女は（麦）粉の中に（環）を描き，煉瓦を置いた。

19　289　anākumi abni īpuša qātaja

「わたしが（それ）を創造し，わたしの手が（それ）を造った。

20　290　tabsūtum ina bīt qadišti lihdu

産婆はカディシュトゥ女祭司[24]の家で歓喜しよう。

22　月が満ちた期間の表象として用いられている。

23　穀類を挽いた粉一般を意味するがここでは麦粉とした。何を叙述しているのか，どんな儀礼行為なのかこの文脈から把握することは困難である。メソポタミアの場合，日常は儀礼に始まり儀礼に終わることが常であったことと，儀礼が厳格に保持され長期にわたって継承されてきたことが分かっている。したがって出産の儀礼も厳密に執り行われていたと推測できるが，残念ながら出産儀礼に関する資料が残存せづ，詳細については不明である。

24　qadistu-女祭司は役割も様々であったようである。ここでは産婆との関係が明らかであるが，シュメール語テキストでは多産や子どもの誕生に関係づけられ出てくる。子どもを持つことは許されていた。同じ女祭司にあっても，naditu-女祭司は子どもを持つことができなかった。

21　291　ali āllitum ulladuma

妊婦が出産するところでは，

22　292　ummi šerri

子の母は

22　293　u'arru[25] ramanša

自ら分娩し，

23　294　9 ūmi linnadi libittum

7 日あいだ煉瓦は置かれよう。

24　295　ituktabit ^{d}Nintu sassūru

ニントゥ，誕生の女神，は敬意を払われよう。

25　296　^{d}Mami ahassunu[26] i tabbi

彼女は彼女たちの妹をマミと呼ぶことでしょう。

26　297　i ta[-　s]assura[27]

彼女は誕生女神を［…］し，

26　298　ittadi kitam

彼女は葦の筵（？）[28] を据えるでしょう。

27　299　ina［　　］nadê erši

彼らの［　　］部屋に寝台が整えられると，

Avi　20　300　lihtir aššatum u mussa

妻と夫は互いに求愛しよう[29]。

21　301　inuma aššūti u mutūti

25　Lambert/Millard は haru 読む。

26　欠字であるが，a]-h-ha-šu-nu と読むことは可能である。

27　Avi 18 i ta［-　s]a-as-su-ra. Lambert/Millard は i-t[a-ad s]a-as-as-ra と読むが，文字の確認は困難である。

28　Dally は「亜麻布」と訳出する。Lambert/Millard は Keša (Kesh) と読む。

29　Lambert/Millard は li-[i']-ti-[lu aš-š] a-tum u musa と読むけれども，この行の 2 文字目は［i'］と読むことは不可能である。

妻と夫の関係に

22　302　ina bīt［　　］e? i tahdu Ištar

［　　］[30] の家ではイシュタルは歓喜しよう。

23　303　9 ūmi lišša kin hidûtum

（そこで）[31] 9 日のあいだ祝宴が設けられよう。

24　304　Ištar lišappu ^{d}Išhara

彼らにイシュタルをイシュハラ[32]（愛人）と声高に呼ばせよう。

25　305　ina［　　］simānu šimti

［15 日に？］運命の定めの時，

26　306　［ attune ta］bianim

［あなたは］私に名前をつけた。

27　307　［　　］

［　　］。

以下およそ 328 行までテキストは欠損する。

48　328　awīlum［　　］

人［　　］

49　329　zukkî muša［bu　］

住まいを浄［め，　　］

50　330　māru ana abišu　］

息子は彼の父に［　　］

30　Lambert/Millard は［舅］を補う。

31　302 行目における Lambert/Millard 読みが正しいとすれば，舅の家を想定されよう。

32　元来シュメールの神々よりはセム系の神々の系譜に近い女神である。したがってメソポタミア中流域で崇拝され，愛の女神としてイシュタルと等位された。See, J. Black and A. Green, Gods, *Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia*, University of Texas Press, Austin, 1997, 110.

51　331　[　　]

[　　]

52　332　ittašbūma [　　]

彼らは座し，[　　]

53　333　šū našî [　　]

彼は運んでいた。[　　]

Avii　1　334　īmurma [　　]

彼は見て，[　　]

2　335　^{d}Enlil [　　]

エンリルは [　　]

3　336　itāhzū laqati [　　]

彼らは [　　] を掴み，[　　]

4　337　allī marrī ibnû ešš**ū**ti[33]

彼らは鍬と鋤を新しくし，

5　338　ikī ibnû rabûtim

彼らは大運河を造った。

6　339　bubūtiš niši tîtiš [ilī]

人々の飢餓と神々の食糧のために。

ここで以下テキストは 340 行から 13 行にわたってほぼ欠損している。

19　352　[ul illikma 600]・600 šanātum[34]

いまだ 1200 年も [経っていなかった。]

20　353　[mātum irtapiš] nišu imtīdā

[国土は広がり,] 人々はあまりにも夥しく増えた。

21　354　mā [tum kīma lî] išappu

33　Lambert/Millard はこの行の文末語を eš-〔re〕-ti（諸神殿）と読む。

34　バビロニアの数は 60 進法を取っていたため，600 は大きな数を示す。これを重ねることで時が長期間経過したことを強調した。なお，352–359 行は欠損・欠字が多く第 2 の書板 1–8 行からの復元である。

国［土は牡牛のように］騒々しくなった。

22　355　ina［hubūrišina］ilu ittadar

神は［彼らの大騒ぎ］で（睡眠を）乱された。

23　356　［^{d}Enlil išteme］rigimšin[35]

［エンリルは彼らの喧騒を］聞いた。

24　357　［izzakar a］na ilī rabûtim

彼は大いなる神々に［言った。］

25　358　［iktabta］rigim awīlūti

「人類の喧騒が［あまりにも大きくなった。］

26　359　［ina hubūriši］na uzamma šitta

［彼らの大騒ぎで,］睡眠を奪われている。

27　360　［qibiama šur］uppu libši

［ご命令下さい。シュルッ］プ-病[36]が発生しますように。

以下 3 行欠損。

31　364　u šū［^{1}Atram-hasīs］

しかし，彼，［アトラ・ハシース］がいた。

35　hubūru（大騒ぎ）と rigmu（喧騒）は類似語を施した修辞法。メソポタミア文学は古典ギリシア語におけるような手の込んだ修辞法はみあたらない。総じて言えることは，セム語全体に言えることでもあるが，いわゆる対句法（Parallelismus Membrorum）が随所に見られる。思想単元として反復することもある。クラシック音楽に施されるテーマに類似しているとも言える。この対句法は本稿で取り扱うテキストにおいてもしばしば看守できる。単元がほぼそのまま反復される場合もあれば，所与の文言を，帰結の文言として叙述する場合もある。これに加えよく用いられる修辞法は類似語や反意語を用いながら背後にあって描出する部分を強固に支持する場合である。ṭemu「知性」と eṭemmu「死霊」は音韻的修辞法でありながら，この場合，人間の本質を描出する部分であるため，単純な反意語と言い難い。メソポタミア人の思惟して「人間とは何か」に対する応答を反意語を用いて強調文にしたて上げたと考えられよう（206-237 行）本稿脚注 7 を参照。

36　悪寒の症状を伴う風邪のような病気か。

32　365　ilšu ^{d}Enki uzunnšu petiāt

彼の神はエンキであった。彼の耳は開かれていた[37]。

33　366　itam itti ilišu

彼は彼の神（エンキ）と話した。

34　367　u šū ilšu itt[išu itam]

そして彼の神は彼と話すことになろう。

35　368　^{1}Atram-hasīs piašu īpšamma

アトラ・ハシースは口を開いた。

36　369　izzakar ana bēlišu

彼の主に言った。

37　370　adi matima［　　］

どれほど長く［神々は私たちを苦しめるのでしょうか。］[38]

38　371　murṣa immidūniati a[na ari][39]

彼らは私たちを「限りなく」病を負わせるのでしょうか。

39　372　^{d}Enki piašu īpšamma

エンキは口を開いていった。

40　373　izzakar ana ardišu

彼は彼のしもべに言った。

41　374　šibūti sillūnni ibbi

「長老たち，（つまり）古参の者たちを招集せよ。

42　375　［　　］nia qirib bītiška

お前の家で［騒ぎ］[40] を始めよ。

37　「彼」はアトラ•ハシースである。エンキのことばに耳を傾けることになる。

38　Dally に従った補充訳。

39　テキストの読みは Lambert/Millard による。

40　Dally による補充訳。

43　376　qerbāmi[41] lissû nāgirū

近くに来て，伝令たちに伝えさせよ。

44　377　rigma lišeppû ina mātim

彼らに国中に喧騒を起こさせよう。

45　378　ē taplaha ilīkun

お前たちの神々[42]を恐れてはならない。

46　379　ē tusallia ištarkun

お前たちの女神たちに懇願してはならない。

47　380　Namtara šīā bābšu

ナムタル[43]の扉を探し求めよ。

48　381　bilā ēpīta ana qudmišu

彼の前に焼いたパンを持ってきなさい。

49　382　lillilšu maṣhatum nīqum

焼いた粉の供物は彼に届こう。

50　383　libāšma ina kadrê

彼はそれらの贈り物によって面目を失おう。

51　384　lišakkil qassu

そして彼は彼の手[44]を拭い取ろう。」

41　Lambert/Millard によれば，この行の出だしは［qi-b］a-ma-mi と読まれる。訳は「…と命ぜよ，」となる。

42　Dally が脚注で指摘しているようにここでの神々はメソポタミアによく見られる家族の神・女神を指していると推定してよかろう。

43　Namtar とも Namtaru とも綴られる「運命」を意味する。一般的には冥界の女王エレシキガルに使える下位の神である。『イナンナの冥界下り』を参照。ある伝承ではエンリルとエレシュキガルの息子で冥界の悪霊としても出てくる。O. Edzard, ‘Mesopotamien’ in *Götter und Mythen im Voderden Orient* (ed.,) H. W. Haussig, Ernst Klett Verlag, Stuttgart, 1962, 108.

44　Dally によると，「彼の手」つまり「神の手」という言葉はアッカド語表現に一般的である「病気」を表すことばである。Dally の脚注 24 参照。

52　385　[1]Atram-hasīs ilqea tertam

アトラ・ハシースは命を受け，

53　386　šibūti upahher ana bābšu

長老たちを彼の門に集結させた。

54　387　atram-hasīs piašu īpušamma

アトラ・ハシースは口を開き，

55　388　izzakar ana šibūti

長老たちに言った。

56　389　šibūti sillunni abbi

「私は長老たち，（つまり）古参の者たちを招集した。

Aviii　1　390　［　　］nia qirib bītiška[45]

お前の家で［騒ぎ］を始めよ。

2　391　qerbāmi lissû nāgirū

近くに来て，伝令たちに伝えさせよ。

3　392　rigma lišeppû ina mātim

彼らに国中に喧騒を起ここさせよう。

4　393　ē taplaha ilīkun

お前たちの神々を恐れてはならない。

5　394　ē tusallia ištarkun

お前たちの女神たちに嘆願してはならない。

6　395　Namtara šīā bābšu

ナムタルの扉を探し求めよ。

7　396　bilā ēpīta ana qudmišu

彼の前に焼いたパンを持ってきなさい。

8　397　lillilšu maṣhatum nīqum

焼いた粉の供物は彼に届こう。

45　375-384 行の繰り返しで，対句による修辞法。

9　398　libāšma ina kadrê
彼はそれらの贈り物によって面目を失おう。
10　399　lišakkil qassu
そして彼は彼の手を拭い取ろう。」
11　400　šibūtum išmu zikiršu
長老たちは彼のことばに耳を傾けた。
12　401　Namtara ina āli
ナムタルのため都市に
13　402　ibnû bīssu
彼らは神殿を造営した。
14　403　iqbūma issû nāgirū
彼らは命じ，伝令たちは伝えた。
15　404　rigma ušeppû ina mātim
彼らは国中に喧騒を起こした。
16　405　ul iplahū ilišun
彼らは彼らの神々を敬わなかった。
17　406　ul usellû ištaršunu
彼らは彼らの女神たちに嘆願しなかった。
18　407　[Namta]ra išiu [bābšu]
彼らは［ナムタ］ルの［扉を］探し求めた。
19　408　ublū epitam ana qudmiš
彼らは彼の前に焼いたパンを持ってきた。
20　409　illikšu maṣhatum nīqum
焼いた粉の供物は彼に届いた。
21　410　ibāšma ina kadrê
彼はそれらの贈り物によって面目を失った。
22　411　ušakkil qassu
そして彼は彼の手を拭い取った。
23　412　[šuruppu itēz]ibšinati

［シュルップ-病が］彼らから［去った。］

24　413　［ilū ana nīqiši］na itturu

［神々は彼らの（いつもの）供物］に戻った。

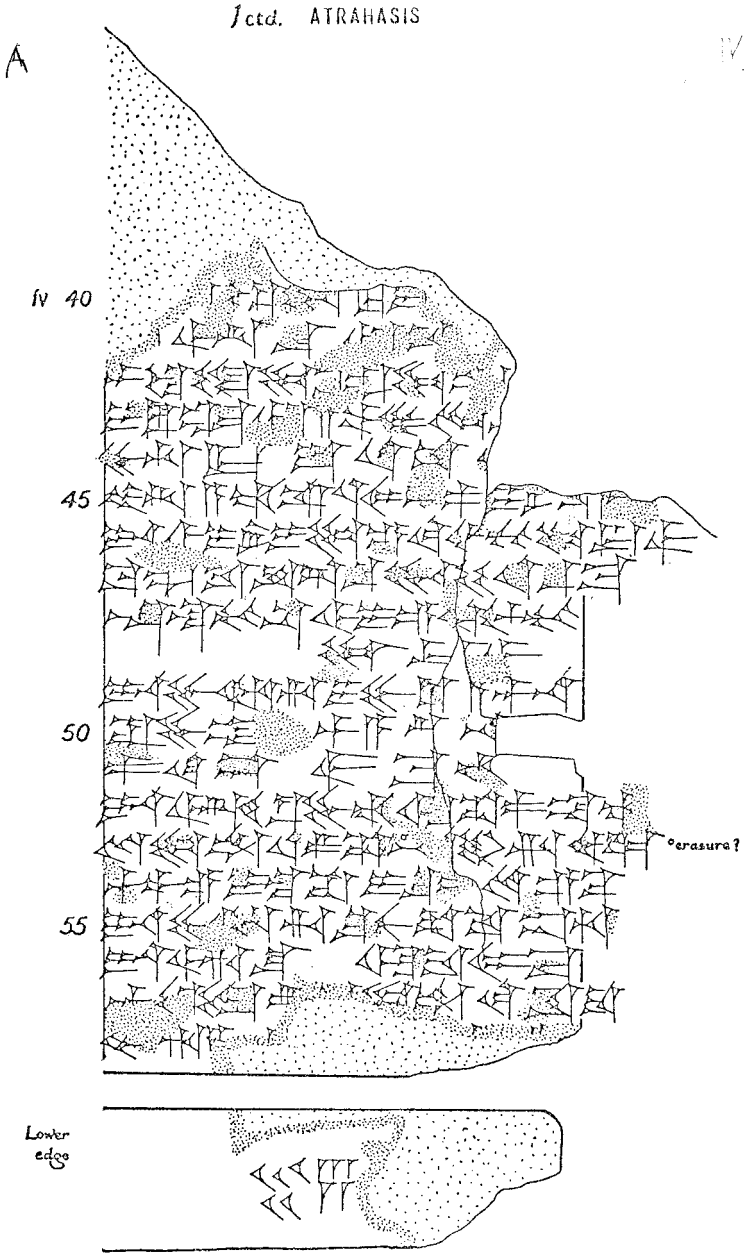
以下 2 行欠損。

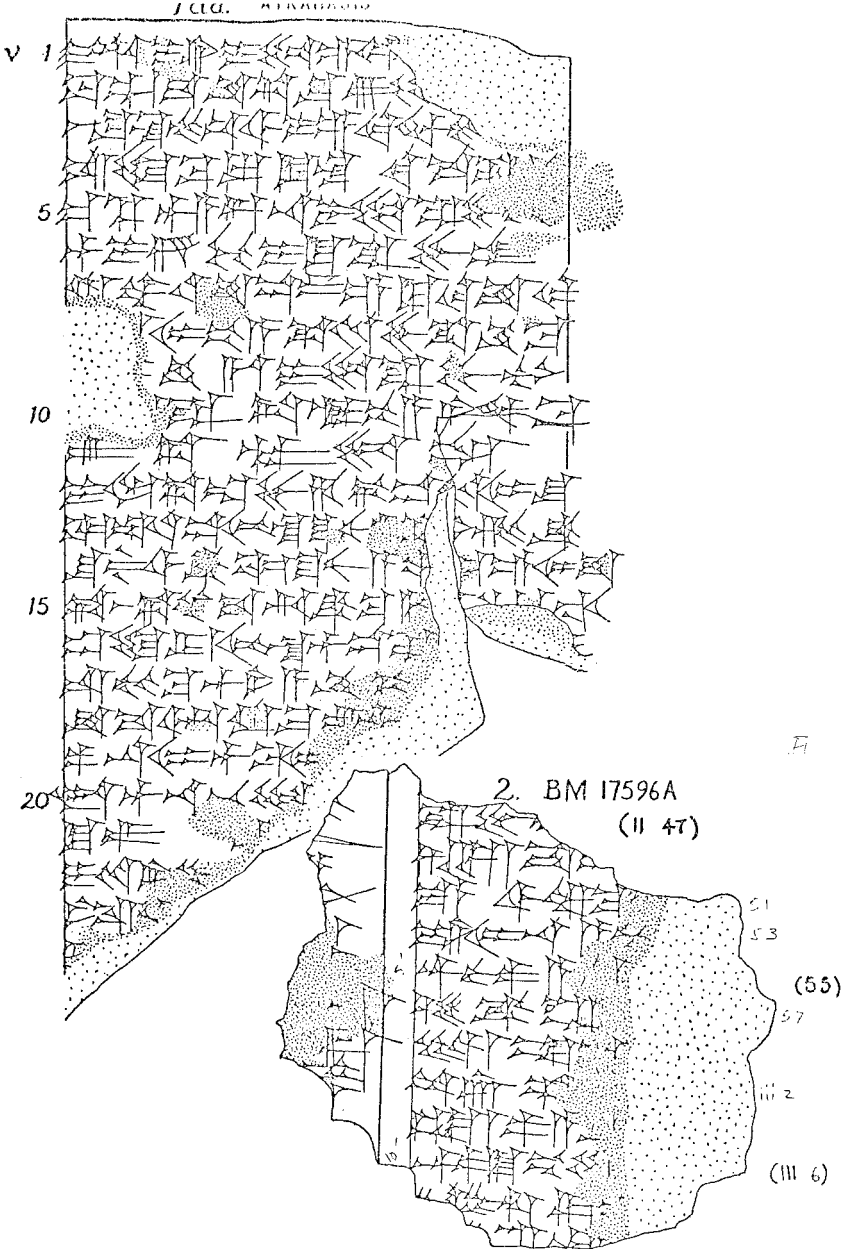
27　416　ul illikma 600・600 šanātum[46]

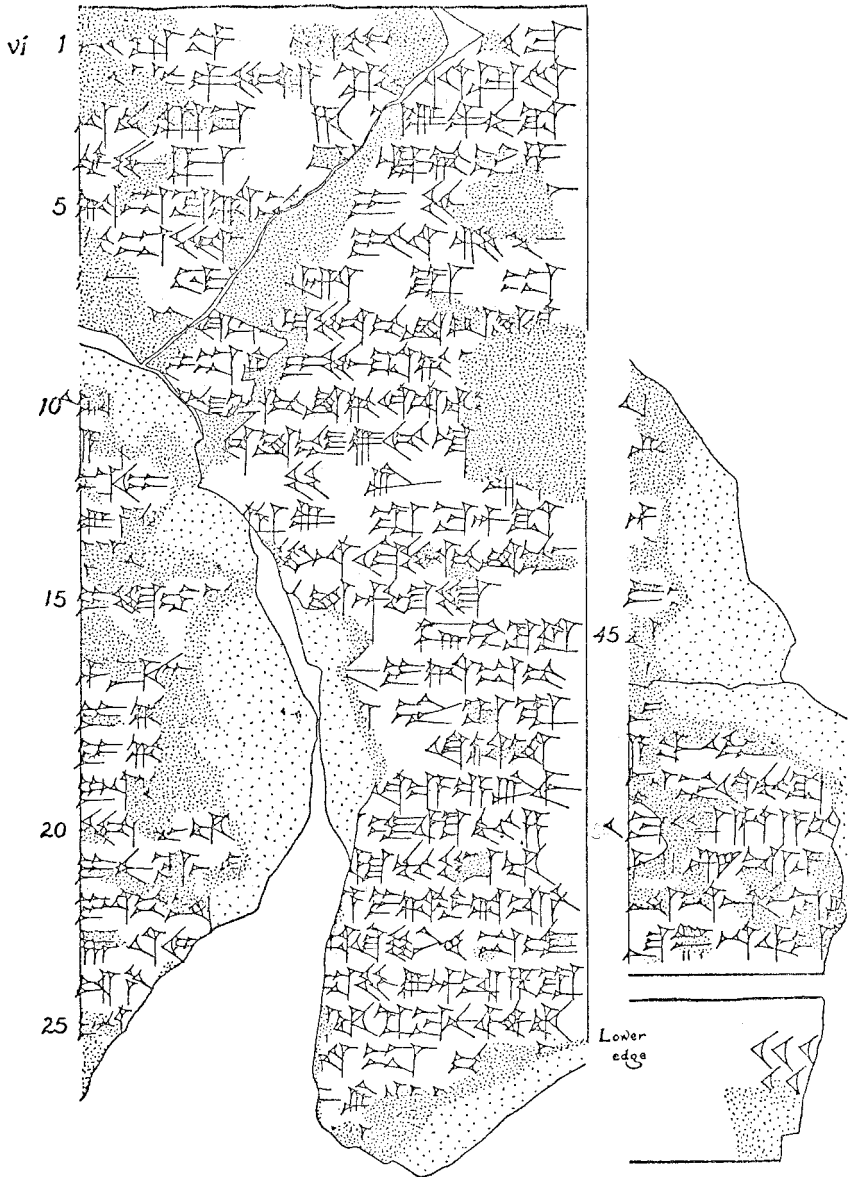
1200 年が過ぎ去った。

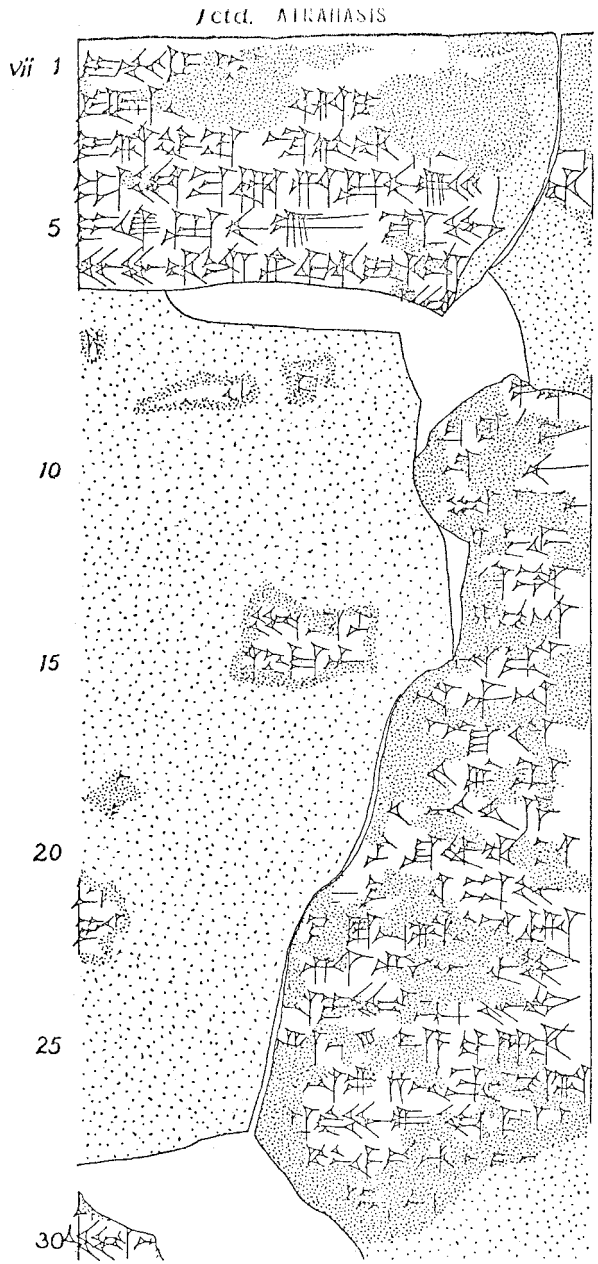
46　第 2 の書板のキャッチラインである。つまり次の書板の 1 行目で繰り返される。

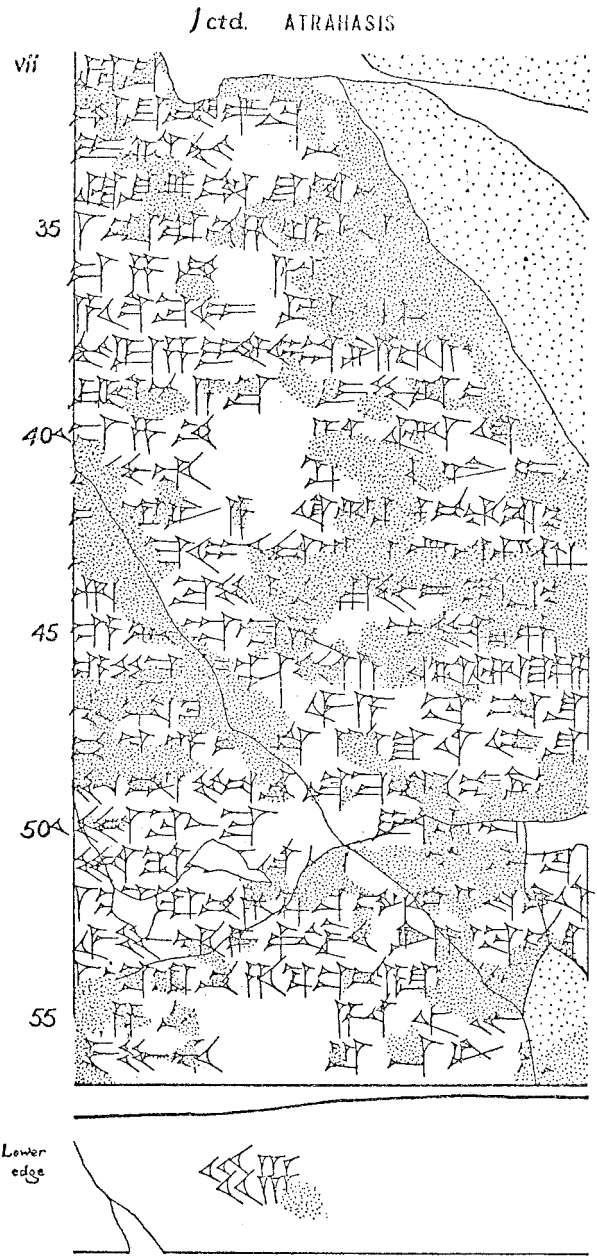
4. BM 92608
Obv. II-III
(III 10)
5
10
15
20
25
30


ctd. ATRAHASIS
A
IV
iv 40
45
50
55
°erasure?
Lower edge


2. BM 17596A
(II 47)
(55)
(III 6)


vi 1
5
10
15
20
25
45
Lower edge


I ctd. ATRAHASIS
vii 1
5
10
15
20
25
30


J ctd. ATRAHASIS
PLATE A
vii
35
40
45
50
55
Lower edge

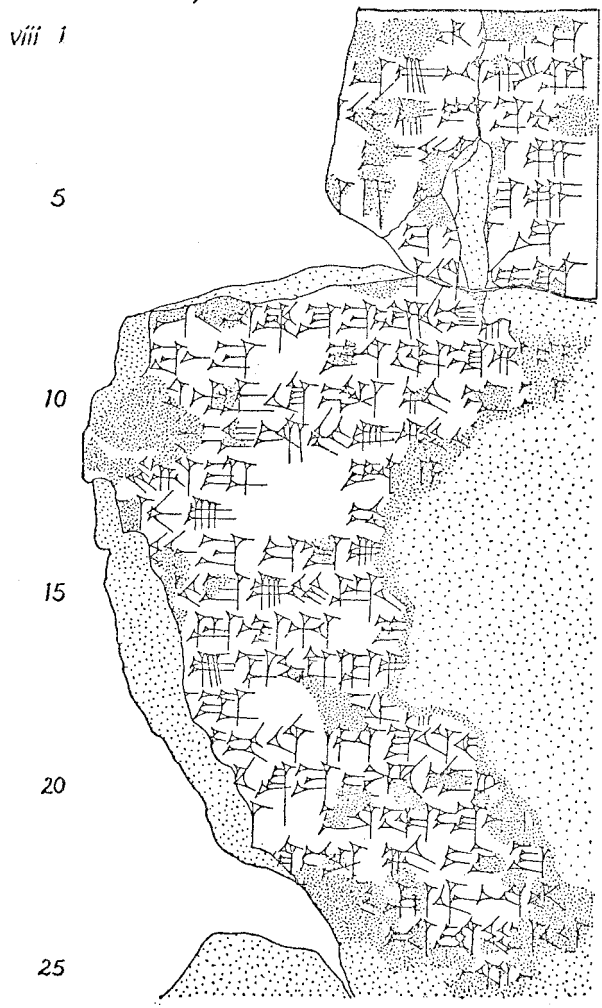
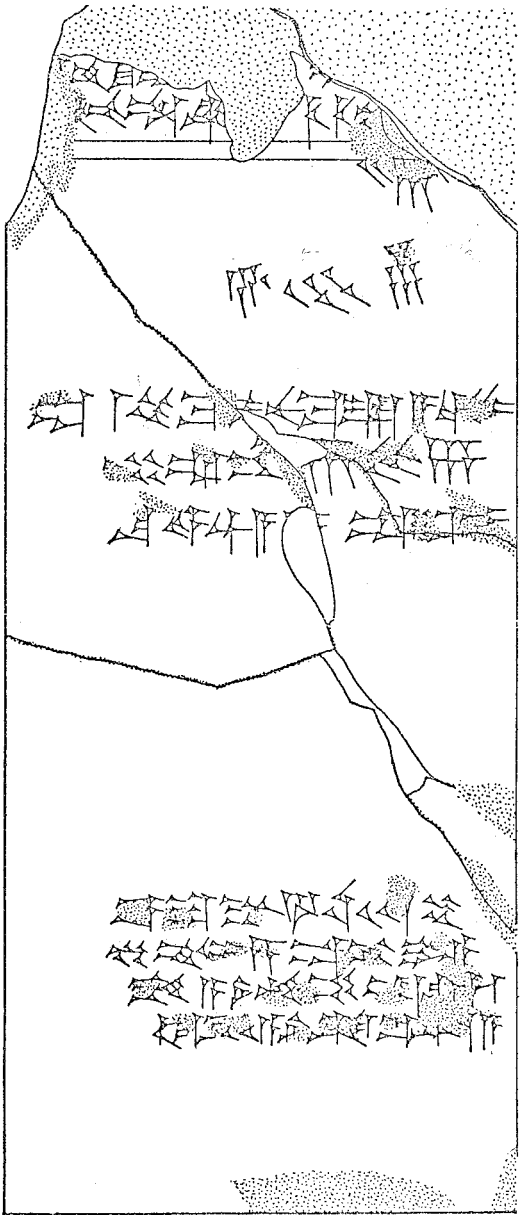

ATRAHASIS
viii 1
5
10
15
20
25

PLATE XII

cont. ATRAHASIS

viii